

一声社：TEL03-3812-0281/FAX03-3812-0537

閑話休題—恩を仇で返す②

「君は、いつもそうじゃないか！ 君は入学式にも出てないだろ！ あの時もみんなを騒がせて、迷惑をかけたじゃないか！」(0 教授)

入学式？ ああ、あの事か。しばらく忘れていた痛い記憶を、全く何の脈絡もなく突然蒸し返されたヨネやんは、ちょっとむっとしたが、まだ疑問は解けない。

「この人は、なんであの事を知ってんのやろ？ ほんで、なんで今蒸し返すん？」

頭の中でぐるぐると考えを巡らせていると、またまた頭の上から天の声。

「君は入学金を持っていなかった。免除されると思い込み、危うく入学辞退になる場所だった。そうだな？ あまりに見通しが甘く無計画、あまりに無謀だ。その弱点が、今また繰り返されているのではないのか？ 私は出席を取らない。形だけ出席して何の意味がある？ 欠席でも、提出物を自分なりの工夫を凝らして、魂を込めて出せばそれで良い。違うか？ 出席を取らない意味を考えなさい。」

ヨネやんの頭は、さらにさらに低くなり、心静かになって、0 教授の言葉の一つ一つを噛みしめていた。

「入学式の時、学生課の A 君が叫んだだろう。『誰かお金を貸して！ このままではこの子が入学辞退になってしまう！』と。あの時、僕はその声を聞いて A 君のところに走り、財布から有り金を出したんだよ」

……そうやったんか、この人は恩人の一人やったんや。A さん以外は名前も知らず、御礼を言うことも出来ひんかった。僕

が無事に入学出来たのは、この方始め皆さんのお陰やった！ 初めて会えた！

「あの時は、本当にありがとうございました。お礼を言うことも出来ず、すみませんでした……」

……0 教授は、受講生の一覧を見た時に、きっと僕やと気づいたんやな。『あの時、危うく入学辞退になりかけた学生が、その後どんな学生生活を送って来たのか』—きっと会うのを楽しみにしていたのだろう。しかし、当の本人は能天気なもので、講義には出席せず、ましてや材料の木材さえ購入していない。本棚提出の日になってようやく出て来たと思ったら、「今から木を売れ」とせがむ。きっとあきれ果てただろう。お金を出して助けた事を後悔したかも。

そんな事をつらつら考えていた時、再び頭の上から 0 教授の声が。

「自分なりに十分考えたようだね、それでいい。どんな時も良く考える事だ。結論だけ覚えてはいけない。今回は特別だよ。木を売ってあげよう。●日までに作れるか？ よし！ もう夏季休暇になるが、頑張りなさい」「ありがとうございます」

夏休み中、木工室を借りて、トントン・カンカン本棚作り。これで、一念発起して素晴らしい作品を出していれば、美しい話として代々伝えられたはず。しかし、未熟なヨネやんはそうは問屋が卸さず、バイトもクラブも休んで本棚を作る事に嫌気がさし、投げやりでいい加減な本棚しか作れなかった。しかしその無様な本棚を見た 0 教授は、こう言ったのだ。

「うん。何と言うか、まあかわいいじゃないか！ 合格だよ」—人間の出来がヨネやんとは天と地ほど違う 0 教授の思い出。